

もう一度足元から

今年の「労働経済白書」(～働きがいのある社会の実現に向けて～)が、7月に公表された。昭和24年に最初の白書が刊行されてから、60冊目にあたるそうだが、今年もなかなかの力作である。

① 経済成長はかなり回復してきたが、その果実が普通の人たちまで行き渡っていない。大企業は利益をあげていても、それが中小企業に行かないし、労働者にも十分に行き渡っておらず、労働分配率も下がっている。こうしたことが景気の足腰の弱さの一因となっている。

② 90年代経営環境の厳しさから、企業の対応は人件費抑制的な視点に傾きがちで、労働者の満足感は長期的に低下。そこには正規以外の従業員の増加も影響している。

業績・成果主義的賃金制度も、運用面で必ずしも成功しているとはいえない。

③ 仕事の満足感について、労働者の認識と企業側の認識には大きなギャップがあり、労働者の不満を十分に経営側は気づいていないのではないか。

しごくまっとうな分析で、その背後に流れる現状への問題意識や思いには、共感できると

ころが多い。「もう少しズバリ言い切ってもいいのでは?」と思うところもあるが、全体として評価できると思う。

ただ現実のスピードは速い。エネルギー・資源価格の高騰に、家計を直撃する物価高。サブプライム問題に端を発した米国発の金融不安と世界同時不況への懸念・・・来年の春闘を前に強い危機感を抱かざるをえない。

しかし、目の前の事象に右往左往しているだけでは、何も始まらない。問題は、バブル崩壊以降の失われた10年とも15年ともいわれるこの間、世界で、そしてわが国で何が起こり、何を変えたのか。何を変えてはいけなかったのか。時代変化に対応するにしても、果たしてその方向は正しかったのか。とられた政策はその狙い通りの結果につながっているのか・・・いまこそ立ち止まってキチンと検証し、冷静・沈着に総括をした上で、徹底した議論の中から今後の進むべき道をしっかりと見定める必要がある。

それにしても、ここ数年の社会的論調とそれに影響されての政治的・政策的スタンスの振幅はあまりにも大き過ぎる。「軸」がぶれすぎているのである。規制改革会議の「再チャレンジワーキンググループ」が、労働法制の抜本的

見直しに向け、悪名高き意見書を発表したのは、ほんのわずか前、昨年5月のことである。「①最低賃金を不用意に引き上げるな、②女性労働者の過度な権利強化は、女性雇用を手控える副作用を生む、③正社員の解雇規制は、非正社員へのシフトを誘発、④労働時間の上限規制は、脱法行為を誘発するだけ、⑤公益、労使による三者構成の労働政策審議会のあり方見直し、⑥派遣労働の期間制限の撤廃」など、まさにアメリカンスタンダードともいべき市場原理・新自由主義的改革路線を前面に打ち出した意見書であった。「ホワイトカラー・エグゼンプション」や「労働ビッグバン」が声高に叫ばれたのも、ついこのあいだの事である。首相が次々に変わり、参議院選挙での与党大敗、格差やワーキングプアなどが社会的問題として浮上するにいたって、潮目は変わりつつあるようにも見える。しかし、その流れは果たしてホンモノなのか。つかの間の景気回復や、政治的状況のなかで、水面下にもぐっているだけではないのか。一旦ふれた振り子の針はまた戻ってきかねない。まさにその時々で、「漂流する日本」になりかねないのだ。

いまこそ、日本の労使関係の真髓が、問われている。戦後の奇蹟といわれた経済成長を支え、石油ショックや円高不況、貿易摩擦など幾度とない危機を乗り越えてきたそのベースには、雇用を第一に、従業員とその家族の生活を守り、人を育て、信頼に裏打ちされた労使関係を築きあげてきた日本型雇用システムがあった。その後のグローバル化や、少子高齢化、情報化などの変革の波の中で、それが

どう変わったのか、変わっていないのか。わが社さえ生き残ればではなく、日本がいま直面している経済的・社会的な閉塞状況と正面から向き合い、社会的責任を含めた新しい意味での日本型コーポラティズム（政労使の社会合意）を再構築していく可能性は本当はないのか、－そのことがまさに問われていると思う。

問題は、マクロだけでなく、ミクロすなわち足元の企業、職場、地域で、個別労使の真剣な議論を、徹底して同時並行的に進めていけるかだと思う。不満に感じることは、最近第一線の経営者の肉声がとんと聞こえてこないことにある。経営者団体を通してではなく、明日の日本を切り開いていく個別企業のトップとして、雇用・労働の未来についても、自らの信念や熱い思いを発信して欲しいのである。

もちろん最終的には、労働組合自身の責任と運動にかかってくる。現場を抱える単組の議論や行動、生の声が伝わってこないのは、労働側にしても同じことかもしれない。いま課題となっている、請負や派遣、有期雇用など非正規労働をめぐる問題は、足元の職場の問題であり、関連企業や下請けや、同じ地域で働く仲間の問題なのだ。

特効薬や打ち出の小槌はない。あたりまえの事を、あたりまえに・・・もう一度足元の職場から、地域から、身近な問題や悩み・要望をしっかりと吸い上げて、みんなで議論しながら共通の目標や要求にしていく。自分だけのことではなく、家族や、働く仲間や、地域・社会のことにも思いを馳せてみる。そんな運動から新しい第一歩が始まるのだと思う。（固茹卵）